
雨降る日は

亜李朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降る日は

【Nコード】

N5766B

【作者名】

亜李朱

【あらすじ】

雨降る日には不思議な事が起きる竜矢が体験した不思議な体験とは…？

―ザー―

激しく降る雨の音が辺りに響く

「あっ降ってきたし……」

俺は黒い雲でいっぱいな空を見上げた

「じゃな竜矢^{たつや}！」

ある友達が俺の肩を叩いて雨の中に消えていった

「俺も走って帰るか……」

濡れるのは嫌だ……けど雨がやむ気配はない。

もうすでに学校には人影がない

……仕方ない

俺は水溜まりがたくさんある道へと飛び出した。

「さみい……」

俺の家は遠い

だからこんな雨の中帰るのは不可能に近い

俺は仕方なく古い公園に入った

人は、まったくいない

雨宿りが出来そうな土管に入った

中は狭いけど雨も当たらないし風も遮ってくれる

贅沢なんか言ってるんじゃないよな：

俺はゆっくりと薄汚れた土管に入った。

「やまないし：」

もう既に土管に入ってから1時間はたった

風や雨をしのげるものの寒いにはかわりない

俺は身を縮めて雨がやむのを待つしか出来なかった。

―タン：タンタン―

「え：？：？」

俺の足元に鮮やかな水色のボールが転がってきた。

一応ボールを拾ってみた

「…?」

不思議と濡れていない

―タッタッタッタ―

首を傾げていると軽やかな足音が響いた

多分ボールの持ち主…。

俺は恐る恐る土管から出た

「あ…サキ…」

「竜矢……」

サキとは俺の元カノ

気まずい空気が流れる

付き合っていた頃の沈黙は、心地よいものだった

でも今はただの気まずい時間が流れるだけ

俺はソッとサキを見た

あの頃と変わらないキラキラした大きい瞳

薄いく紅い唇に寒さのためか赤くなったほほ…

―ドキンッ―

俺の心臓が暴れだす

また淡い感情がこみあげてきた

「ボール見なかった…？」

サキが沈黙を破りキョロキョロと辺りを見渡す

ボール……あああの水色の…

俺はボールを差し出そうとした

だがボールが何故かない

「おかしいな…あったのに…」

困る俺を見てサキは笑顔で言った

「いいよ。どうせ私のじゃないから」

「…そっか」

「…こんな風に話すの…久しぶりだね」

俺たちの別れは相手の大切さが分からなくなったから

でも別れてから気づいたサキの大切さ

でも気づいた時は遅かった

でも今なら……今なら……

俺は勇気を振り絞り君に言う

“ずっとサキといたい!”

あの時のボールはきつと俺らを結びつけるかのようにだった

俺とサキの雨降る日の不思議な体験だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5766b/>

雨降る日は

2011年1月13日04時53分発行